

代表者 3A 中村 康平
指導者 佐藤 裕也

はじめに

鹿角には、多くの伝説が残されており、歴史や文化を知る上で非常に意義深いものである。そのうち「芦名沢の観音様」は主に砂沢（現在の山根地方）に伝わる由緒のある伝説で、悲恋の物語として本校の生徒にも親しみやすいものとなっている。

I テーマ設定の理由

本講座は、講座番号17、19との合同で行うものであり、最終的には「芦名沢の観音様を劇で演じる」という大きな目標がある。これは、「芦名沢の観音様」の伝説を多くの人に継承したいという考えによるものである。

本講座では劇の核となる脚本づくりを通して、「分かりやすい、伝わりやすい、演じやすい脚本」とはどのようなものかを考えながら物語を多角的に見て伝説の本質に迫りたいと思い、設定した。

II 実施計画

- 1 オリエンテーション
- 2 「芦名沢の観音様」内容確認
- 3 「芦名沢の観音様」脚本作成
- 4 講師による指導
- 5 脚本の訂正
- 6 脚本読み合わせ・舞台準備
- 7 演技稽古
- 8 発表会

3～5までは脚本班のみで行い、それ以外は講座番号17、19と合同で行った。

III 調査・研究内容

- (1) 「芦名沢の観音様」脚本作成

参考文献をもとに、「芦名沢の観音様」のあらすじを見よう見まねで脚本化した。作成した脚本は以下の通りである。

息子ー父さん、話ってなんだよ。
孫七ーああ・・・お前市兵衛のこの娘が好きなのか？
息子ー・・・だとしたら何だと言うんだ。
孫七ーお前達の結婚は認めない。
息子ーふざけるな！
孫七ー昔からあいつの家とは仲が悪くてな、悪いとは思っているがお前達の結婚は認められない。あいつの家に近づくこともだ。
息子ーそんな・・・。
(孫七退場、照明を切り替え市兵衛側へ。)

(2) 講師による指導

6月20日(火)、講師として脚本家である高木豊平先生をお招きし、「芦名沢の観音様」の脚本を添削していただいた。御指摘をいただいたのは主に以下の点である。

- ①ナレーションはなるべく使わないこと。ナレーションがいると説明的になり、舞台が平淡になってしまう。
- ②あらすじに直接関係のないような場面(例えば、主人公が商店を物色している場面)こそ、具体的に描写すべきだということ。そうすることで舞台がリアリティーになる。
- ③劇とは人間が舞台の上で輝くような構造をもつこと。

限られた時間ではあったが、プロの脚本家の御指導をいただけたことはたいへんありがたいことだった。特に、②は脚本を自然な流れにするための工夫として重要だという御指摘は印象に残っている。

(3) 脚本の訂正

前時に高木先生から御指摘いただいた点を中心に、再度脚本を読み直し訂正を重ねた。ナレーションベースで作っていた脚本を、台詞ベースに書き改め、観客が分かりやすく役者が演じやすい脚本を作り上げた。訂正したものを一部提示する。なお、以下の部分は(1)で示した箇所と同じ場面である。

—II場—

(孫七と息子が向かい合って食事をしている)

孫七—味はどうだ？

息子—(食べる仕草をする) 美味しいけど、芦名姫が作った方が美味かったなあ。

孫七—・・・芦名姫？

息子—ん？(笑顔で) ああ。

孫七—お前、芦名姫が好きなのか？

息子—(取り繕うように) えっ！？ そ、そんなわけないだろう。

(小声でつぶやく) 姫と結婚したいなんて口が裂けても・・・。

孫七—聞こえているぞ・・・。

息子—あっ(慌てて口を覆う)

孫七—気持ちは分かった。だが、結婚は駄目だ。

息子—(怒った感じで) はあっ！ 一生独身でいるって言うのかよ！？

孫七—そうじゃない！(皿を払い落とす)

息子—芦名姫以外ならいいのか！！

孫七—そういう意味でもない！！

・・・(ため息をする) 市兵衛とは昔から色々と言いつ争っている。

息子—そんなの、父さんたちの問題だろ！

孫七—とにかく(立ち上がる) 駄目なものは駄目だ。(吐き捨てるように言い、退場)

息子—おい、待てよ！(間) そんな・・・。

(照明が消え、息子が皿を片付けて上手に退場)

高木先生から御指摘いただいた点を修正したことで、ナレーションベースで説明的だった脚本が見違えるように生き生きとしたものになった。また、あらずじに直接関係のないような場面(今回例示した箇所であれば、登場人物が食事をしている場面)を追加したことで、物語全体のいびつさがなくなり自然な流れになった。

(4) 演技稽古

作成した脚本を講座番号17、19の生徒と一緒に読み合わせを行った。読み合わせをして脚本の語尾や表現などを一部訂正し、演じやすい脚本を作り上げた。

(5) 発表会

12月20日(水)に、かづの学の公開研究発表会が行われた。本講座は予定通り「芦名沢の観音様」の演劇を行ったが、演劇初心者達が限られた時間の中でいちから舞台を創り上げたことを考えれば、非常に良い出来だったと思う。生徒や来賓の方からの評価も、概ね肯定的なものが多かったと言える。何より、演劇を通して生徒が地元へ伝わる伝説を多角的に考察し、演劇という形で発信できたことは本当に喜ばしいことであると言える。

IV おわりに

先述のとおり、鹿角には多くの伝説が残されている。それらの伝説がなぜ現代にも残され我々にとって身近なものとして伝わっているのかというと、文献や口承などあらゆる媒体を介してでも後世に残していきたいと当時の人が考えたからに他ならない。今回は劇という方法をとって、「芦名沢の観音様」伝説を知ってもらおうとした。後世への伝承という点で考えると、これは非常に大きな意義を持つことであると思う。

かづの学で学習を通して、生徒には郷土への関心や郷土愛が確かに萌芽したはずだ。これからもその気持ちを絶やすことのないよう願っている。

参考文献

- ・森治美『ドラマ脚本の書き方—映像ドラマとオーディオドラマ』(新水社、2008年)
- ・カール・イグレスィアス『「感情」から書く脚本術 心を奪って釘づけにする物語の書き方』(フィルムアート社、2016年)

